日韓語の動詞結合の対照研究

—「食べる／먹다」をV2とする例を中心に—

李 忠 奎*
(e-mail：ch4229@hanmail.net)

目　次

1. はじめに
2. 日韓語の動詞結合
3. 「食べる」をV2とする動詞結合
4. 「먹다」をV2とする動詞結合
5. 「食べる」と「먹다」をV2とする動詞結合の対照
6. 日韓語の動詞結合の間に見られる相違点の根本的な原因
7. まとめと今後の課題

1. はじめに

一般に，日本語と韓国語はよく似ていると言われており，その指摘は，(1)の例文からも確認できる。

(1)a. 田中がパンをちぎって食べた。
　　b. 다나카가 빵을 떼어 먹었다.

日韓語ともに，「田中」「다나카」という人物が「パン」「빵」という対象に，「ちぎる」「떼다」という動作を通して「食べる」「먹다」という行為を行ったことを描写している。文の形成に参加する構成要素も，それらが配置された順序も同じであることが言える。

ところが，(1)の例文に対して，文の構造はそのまま固定しておいて，「パン」「빵」と

* 韓南大学校日語日文学科，時間講師，対照言語学

www.kci.go.kr

いう対象だけを「酒代」「술값」に置き換える操作を行うと，日本語では適格な文として成立しないのに対して，韓国語では適格な文として成立する[1]，という相違点が生じる。

(2)a. *田中が酒代をちぎって食べた。
b. 다나카가 술값을 떼어먹었다.

つまり，(1a)の「ちぎって食べる」は，「パンを」という名詞句とは共起できても，「酒代を」という名詞句とは共起できないのに対して，それに対応をする(1b)の「떼어 먹다」は，「술값을」という名詞句とも共起可能なのである。この違いを「意味変化」という観点からすると，前者は「意味変化」が起こらないのに対して，後者は「意味変化」が起こり，それによって「(酒代を)踏み倒す」という新しい意味を獲得したと捉えることができる。日韓語の動詞結合の間には，このように分析可能な例が数多く見られるが，これは何を意味するのだろうか，また，そこから何が説明できるのだろうか。

本稿では，(1)と(2)の間に見られる相違点に着目し，「食べる」と「먹다」をV2とする日韓語の動詞結合を取り上げ，その疑問を明らかにしたい。

2. 日韓語の動詞結合

本論に入る前に，日韓語の「動詞結合」の定義を明確にし，どのようなものを含むのかについて具体的に示しておこう。本稿における「動詞結合」とは，文字通り，動詞と動詞が結合したものであり，具体的には形態構造という観点から，以下のように大別されるものを指す[2]。

(3)a. 押して倒す，飛んでみる，打って出る，… ：{－て}
b. 押し倒す，褒め称える，堪え忍ぶ，…
(4)a. 볶아 먹다，먹어 보다，알아보다，… ：{－어}[3]

1) この場合，(1b)と(2b)の動詞結合の間に見られる「分かち書き」の有無は捨象して考える。(2b)の動詞結合に「分かち書き」をしなかったのは，(1b)の動詞結合とは統語や意味の面において性質が異なることを意図的に示すため，に過ぎないからである。なお，本稿では「句」と「補助動詞結合(＝「補助動詞を含む動詞結合」の略)」の場合は分かち書きをし，「複合動詞」の場合は分かち書きをしない。
2) (3)と(4)に挙げたタイプ以外に，例えば，「歩きながら食べる」「食べつつ歩く」「일어나며 말하다」「웃게 만들다」など，他にもある特定の要素(＝下線)が介在する「動詞結合」として分析可能な例は存在すが，①一般に，これらが「語」(＝「複合動詞」)として扱われることはないことと，②研究の目的上，本稿では，ある要素が介在することによって「語」(＝「複合動詞」)としての可能性が出てくる動詞結合を考察対象として限定する必要があったため，{－ながら} などが介在するものは考察対象から除外した。姫野(1999：3～10)，南·高(1993：214～215)も参照されたい

www.kci.go.kr

b. 먹고 가다，읽고 있다，주고받다，… ：{－고}
c. 찾아다 쓰다，넘어다보다，돌아다보다，… ：{－어다}
d. 굶주리다，오르내리다，여닫다，…

(3)は，日本語の動詞結合は「{－て} という要素が介在するタイプ(＝3a)」と「{－て} という要素が介在しないタイプ(＝3b)」の二つのタイプがあることを示したものであり，(4)は，韓国語の動詞結合も「{－어} {－고} {－어다} という要素がそれぞれ介在するタイプ(＝4a～c)」と「それらの要素が介在しないタイプ(＝4d)」の二つのタイプがあることを示したものである。形態構造という観点からこのように分類すると，日韓語の動詞結合は，「介在要素有りタイプ」(＝3a，4a～c) と「介在要素無しタイプ」(＝3b，4d)に大別されるという共通点が明示できるが，この指摘は，日韓語の動詞結合に関する対照研究を対等な立場から出発するという点で重要な意味を持つ。

さて，(3)と(4)に挙げた例を見てみると，「押し倒す」「오르내리다」など，一般に「複合動詞」と呼ばれているもの，「飛んでみる」「먹어 보다」など，一般に「補助動詞結合」に言及する際に登場するもの，そして，「押して倒す」「먹고 가다」など，「複合動詞」としても「補助動詞結合」としても分類されず，「接続構成」「句」などと呼ばれる(姜(1998)，李・蔡(2001))もの[4]が混在していることが分かる。このように日韓語の動詞結合には，「複合動詞」「補助動詞結合」「句」という三つが含まれており[5]，その結果，ある問題の動詞結合が「句」なのか「補助動詞結合」なのか，それとも「複合動詞」なのかといった問題が(特に，韓国語文法において)生じる場合が出てくる。すると，それを区別するために様々な判別基準を適用し，判別しようとするが，例によっては明確な線が引けない場合もあり，その分類が常に明確にできるとは限らない。

以上のことを踏まえた上で，3節では「食べる」を，4節では「먹다」をV2とする動詞結合について詳細に分析する。そして，その考察結果から得た共通点と相違点を5節でまとめた後，6節で相違点が生じる根本的な原因を明らかにする。

---

3) 動詞語幹の最後の母音が陽母音(－아，－오)の場合は {－아} が，動詞語幹の最後の母音が陰母音(－어，－우，－으，など)の場合は {－어} が選択される。{－아다} と {－어다} も同様である。以下，{－아／－어} と {－아다／－어다} の代表形として，それぞれ {－어} と {－어다} を用いることにする。なお，本稿における「語幹」の規定は，6節で行う。

4) 本稿では，「押して倒す」などの例を単純に「句」と呼び，「複合動詞」と対立させる。

5) 李(2008b)は，動詞結合の下位分類として「複合動詞」「補助動詞結合」「句」とともに「句と断定できないもの」も設けているが，本稿の主な考察対象である「食べる」と「먹다」をV2とする動詞結合の中には，「句と断定できないもの」の例が多くないので，本稿では設けない。なお，「句」の判別基準については，李(2008b)を参照されたい。

www.kci.go.kr

3. 「食べる」をV2とする動詞結合

「食べる」をV2とする動詞結合は，形態論的観点から大きく二つのタイプに分けられる。一つは，｛－て｝という要素が介在するタイプであり，もう一つは，｛－て｝という要素が介在しないタイプである。以下，両タイプについて考察し，各タイプに対する本稿の立場を明示する。

3.1. 介在要素｛－て｝有りタイプ

まず，｛－て｝という要素が介在するタイプから見てみよう。

(5)a. 山田はカレーを作って食べた。
b. 中田はさんまを焼いて食べた。

(5a)の「作って食べる」と (5b)の「焼いて食べる」は，「作る」「焼く」が｛－て｝を挟んで「食べる」と結合したものである。形態論的に「V1の連用形[6)]＋て＋V2」のように一般化することができ，以下のようなものが同じ形態構造を有するものとして挙げられる。

(6) 揚げて食べる，炙って食べる，炒めて食べる，買って食べる，齧って食べる，乾かして食べる，噛んで食べる，切って食べる，刺して食べる，すくって食べる，包んで食べる，取って食べる，煮詰めて食べる，煮て食べる，拾って食べる，混ぜて食べる，剥いて食べる，蒸して食べる，茹でて食べる，割って食べる，…

(6)の例を見てみると，V1に「食べる」の「手段」として解釈される動詞が多いことが指摘できるが，実際に，上の例以外にも「どうやって食べるか」という「食べる」の「手段」の解釈が可能な動詞は全てV1に立つことができると考えられる。

さて，(5)と(6)に挙げた動詞結合は，どのように位置付けられるのだろうか。つまり，それらは「句」なのか，「複合動詞」なのか，それとも「補助動詞結合」なのか。

まず，「補助動詞結合」として分類される可能性から考えてみよう。一般に，日本語の「補助動詞結合」というと，「～ておく」「～てしまう」「～てみる」「～ていく」「～てくる」などを含む動詞結合を指す場合が多いが，そこに「～て食べる」は含まれない。その理由は，言うまでもなく「～て食べる」が「補助的ではない」からだ。

(7)a. 念のため，直子は相手の名前を書いておいた。
b. 直子は相手の名前を書いた。

6) ここ(と以下の何ヶ所)では，便宜上，「連用形」という用語を用いているが，6節において日韓語の動詞結合を対等な立場から対照し，そこに見られる共通点や相違点をより適切に説明するためには，「語幹」という概念を導入する必要があることを検証する。

www.kci.go.kr

c. *直子は相手の名前を置いた。
(8)a. 山田はカレーを作って食べた。 (＝5a)
b. 山田はカレーを作った。
c. 山田はカレーを食べた。

通常，「補助動詞結合」における「補助動詞」として認められるためには，(7)の「～ておく」のように，少なくとも統語の面では「格支配能力」を有さなくなることと，それと連動して意味の面では動詞本来の意味がそのまま保持されず，後退してしまう必要がある。しかし，「～て食べる」は，(8c)から分かるように，格支配能力を有しており，動詞本来の意味もそのまま保持されていることから，統語的にも意味的にも全く補助的ではない。つまり，(8a)の「食べる」は本動詞なのである。従って，(5)と(6)の例が「補助動詞結合」として分類される可能性はまず除外される。

次に，「複合動詞」としての可能性であるが，周知の通り「複合動詞」は「複合名詞」「複合形容詞」「複合副詞」と共に「複合語」の下位分類であり，「複合語」は「語」の一種なので，「複合動詞」は「語」ということになる。それを踏まえた上で，以下の例文を見てみよう。

(9)a. 山田はカレーを作って，腹一杯食べた。
b. 中田はさんまを焼いて，おいしく食べた。

(9)は，影山(2006：6)を参考にし[7]，(5)の動詞結合が「1語」としての資格を有するのかということを形態・統語的観点からテストしたものであるが，この結果からすると，(5)の動詞結合を「1語」として認めることには困難が生じる。このことは，意味的観点からも同様で，(5)の動詞結合は，「(カレーを)作ってから食べる」「(さんまを)焼いてから食べる」のように解釈されることから，V1とV2が二つの独立した動作，つまり，「2語」であると考えられる。すると「複合動詞」としての可能性も高くない。

最後に，上記の動詞結合を「補助動詞結合」としても「複合動詞」としても処理しにくいのなら，可能性として残るのは，「句」だけになる。本稿では，(9)のように，境界部にV2だけを修飾できる語句が挿入可能なことと，(10)のように，V1だけを否定にしたり，V2だけを否定にしたりする操作が可能なこと，また意味的にもV1とV2が二つの独立した動作であることなどを考慮して，(5)と(6)に挙げた動詞結合を「句」として処理する。

(10)a. 夕飯は，昨日作って食べなかった餃子にしよう。
b. 生椎茸を十分焼かないで食べると，椎茸皮膚炎といって発疹や強いかゆみを伴った症状になる人がいる。（http://shiitakeyama.com）

7) 影山(2006：6)は，「一般的に，語(word)という言語単位は，その内部を統語的な要素によって分断されないという形態的緊密性を備えている」と述べた後，「形態的緊密性を見極めるテストにはいろいろなものがあるが，最も分かりやすいのは，内部に副詞が介在できるかどうかである」と指摘している。

www.kci.go.kr

3.2. 介在要素｛－て｝無しタイプ

次に，｛－て｝という要素が介在しないタイプである。

(11) 次郎は朝からラーメンをむさぼり食べた。

(11)の「むさぼり食べる」は，形態論的に「むさぼる」という動詞が｛－て｝を挟まずに「食べる」と結合したものである。一般化すると「V1の連用形＋V2」となるが，このような形態構造は，通常，日本語の「複合動詞」として扱われており，以下のような根拠によって「1語」としての地位を獲得している(影山(1993，1999，2006))。

(12)a. *次郎はラーメンをむさぼり{は／も}食べた。 (← 副助詞不可)
b. *次郎はラーメンをむさぼり，おいしく食べた。 (← V2だけの修飾語句不可)
c. *次郎はラーメンをむさぼらないで食べた。 (← V1だけの否定不可)

本稿においても (11)の「むさぼり食べる」を「複合動詞」として認めるが，「食べる」をV2とする日本語の複合動詞は，この1例しかないようである。同じタイプの例が今まで調べた範囲ではまだ見つからない。

以上，3.1.～3.2.の考察結果をまとめると，以下のような指摘が可能になる。

(13)a. 「食べる」は，｛－て｝が介在するタイプの中では，V2としての生産性が非常に高いが，｛－て｝が介在しないタイプの中では，V2としての生産性がほぼゼロに近い。
b. (13a)の指摘を言い換えれば，V2として用いられる「食べる」は，主に「句」の形成に関わり，「複合動詞」の形成には殆ど関わらないとも解釈できる。

3.3. 「食う」との比較

「食べる」と関連する動詞に「食う」がある。参考までにここでは，生産性という観点から両者を比較し，「食べる」ではなく「食う」をV2として選択しても，上の(13)の分析結果はほぼ変わらないことを確認する。【表1】は，両者の生産性を比較するために，『広辞苑』第五版(1998) と『複合動詞資料集』(1987)に収録されているリストを整理したものである。

【表1】「食べる」と「食う」の生産性の比較

	句(V2)	複合動詞(V2)	複合動詞(V1)	複合名詞(N1)	複合名詞(N2)
食べる	多数	(0/1)	(07/16)	(07/—)	(00/—)
食う	多数	(0/2)	(48/39)	(37/—)	(53/—)

注：太枠(＝本稿の対象)，括弧内の数字(＝『広辞苑』第五版(1998)の数／『複合動詞資料集』(1987)の数)，括弧内の「—」(＝『複合動詞資料集』(1987)の対象外)

www.kci.go.kr

表を見てみると，「句」と「複合動詞」におけるV2としての両者は，生産性の面において，殆ど差がないことが分かる。「句」におけるV2としての「食う」が「多数」になっているのは，(6)に挙げた全ての例を対象に，V2「食べる」を「食う」に置き換えた場合，日本語の動詞結合として問題なく成立することを反映したものであり，「複合動詞」におけるV2としての「食う」が「0／2」になっているのは，『複合動詞資料集』(1987)だけに「引っ食う」「むさぼり食う」の二語が収録されていることを反映したものである(なお，二語のうち，前者が現代日本語として用いられることは殆どないだろう)。結果的に，考察対象を「食う」をV2とする動詞結合(＝「句」と「複合動詞」)にしても，(13)の分析結果は同じようになるのである。ちなみに，「食べる」と「食う」の間に生産性の差が生じるのは，V1として用いられる「複合動詞」の場合と「複合名詞」の場合である。表を見ると，「食う」の方が「食べる」より生産性が高いことが確認できるが，これは例えば，「最後まで食い下がる」「親の財産を食い潰す」の例文を「*最後まで食べ下がる」「*親の財産を食べ潰す」のようには言わず，「食い倒れ」「食い別れ」「人食い」「飲み食い」の名詞をそれぞれ「*食べ倒れ」「*食べ別れ」「*人食べ」「*飲み食べ」のようにも言わないことが反映された結果であろう。両者の間で全体的に言えることは，「食べる」より「食う」の方が複合しやすい性質を持っているという点である。「食べる」は，本来は「与える」「くれる」の意の尊敬語「賜(た)ぶ」に対する謙譲語で「いただく」の意であり，かつての日本語では「食べる」を「食う」と言っていたので，上記に見られる生産性の違いは，語彙史における両者の違いの反映であると考えられる。

4. 「먹다」をV2とする動詞結合

「먹다」をV2とする動詞結合は，形態論的観点から，大きく三つのタイプに大別される。｛－어｝という要素が介在するタイプ，｛－고｝という要素が介在するタイプ，｛－어다｝という要素が介在するタイプがそれである。以下，各タイプを個別に見ていく。

4.1. 介在要素｛－어｝有りタイプ

まず，｛－어｝という要素が介在するタイプから見てみよう。このタイプは，「V1とV2の結合度」と「(V2の)意味変化」という観点から，①「句」として分類されるもの，②「句」とも「複合動詞」とも分類され得るもの，③「複合動詞」として分類されるもの，の三種類に下位分類できる。

4.1.1. 「句」として分類されるもの

これは，V1とV2の結合度が緩く，「먹다」の本来の意味もそのまま保持されているとい

www.kci.go.kr

う点で，「句」として考えられるものである。「만들어 먹다」「구워 먹다」などが例として挙げられ，「食べる」をV2とする日本語の「句」と対等なレベルで対照可能な種類となる。

(14)a. 야마다는 카레를 만들어 배부르게 먹었다.
b. 나카타는 꽁치를 구워 맛있게 먹었다.

(14)の例文は，(9)の例文を韓国語で逐語訳したものであるが，日本語と同一の操作が可能であることが確認できる。つまり，V2だけを修飾できる語句が挿入可能なのである。(6)に挙げた全ての例についても同じことが言える。ちなみに，韓国語の文法では，「複合動詞」なのか「句」なのかを判別する基準として，｛－서｝の挿入可否が広く採用されており(金起赫(1995，1996)，金(1992)，金倉燮(1981，1996)，徐(1992，1996)，손세모돌(1996)など)，境界部にそれが挿入可能であれば，「複合動詞」ではなく「句」として処理することが多いが，(14)の例は「만들어서 먹다」「구워서 먹다」のように，｛－서｝の挿入が可能であり，これも上記の例を「句」として認定する一つの判断材料として考える。

4.1.2. 「句」とも「複合動詞」とも分類され得るもの

同一の形態構造を持つ動詞結合が，文脈次第で「句」としても「複合動詞」としても分類され得ると考えられるものであり，冒頭に挙げた例が典型的なものとして挙げられる。

(15)a. 다나카가 빵을 떼어 먹었다. (＝1b)
b. 다나카가 술값을 떼어먹었다. (＝2b)

(15a)の「떼어 먹다」と (15b)の「떼어먹다」は，両方とも「떼다」と「먹다」が｛－어｝という要素によって結合されたものであり，同一の形態構造を持つ。しかし，V1とV2の結合度や意味などを観察すると，両者の間には明確な相違点が指摘できる。

(16) 다나카가 빵을 떼어{서／맛있게} 먹었다.
(17) *다나카가 술값을 떼어{서／의도적으로} 먹었다.

(16)は，(15a)の「떼어 먹다」ではその内部に｛－서｝の挿入が可能であり，また，副詞の働きをする語句を挿入し，V2だけを修飾することも可能であることを示したものである。これはちょうど，先の(14)で指摘した考察結果と一致しており，従って，(15a)の「떼어먹다」は「句」として考えられる。一方，(17)は，(15b)の「떼어먹다」ではその内部に｛－서｝の挿入が不可能であり，また，副詞の働きをする語句を挿入し，V2だけを修飾

www.kci.go.kr

することも不可能であることを示したものである。先の(15a)の「떼어　먹다」とは，V1とV2の結合度が異なっており，その結果，統語的な性質を異にしているのである。意味的にも＜食物を噛んで飲み込む＞という「먹다」の本来の意味がそのまま保持されているとは言えない。この場合本稿では，(15b)の「떼어먹다」は，(15a)の「떼어　먹다」が「意味変化[8)]」を起こし，その結果,「複合動詞」に生まれ変わったものと考える。いわば，「意味変化」による「句」から「複合動詞」への転換として捉えるのである。「귤을　까　먹다／재산을　까먹다」「과자를　받아　먹다／뇌물을　받아먹다」「피자를　시켜　먹다／후배를　시켜먹다」「땡감을　우려　먹다／군대　이야기를　우려먹다」などの例が同じ分析が可能なものであり，同一の形態構造を保持しながら，「／」の左側の意味として用いられる文脈では「句」として，右側の意味として用いられる文脈では「複合動詞」として分類されるのである。このように「意味変化」による「句」から「複合動詞」への転換という分析が可能な例は他にも数多くあり，このタイプの存在は，日本語との対照において重要なポイントになる。その点については，5.3.で詳述する。

4.1.3. 「複合動詞」として分類されるもの

これは，V1とV2の結合度が強く，「먹다」の本来の意味がそのまま保持されず，「意味変化」が見られるという点で，「複合動詞」として考えられるものである。同一の形態構造を持つ「句」が想定できないものでもある。

(18)a.　영수가　후배를　부려먹었다.
　　b. *영수가　후배를　부려{서／실컷}　먹었다.

(18a)の「부려먹다」は，「부리다」と「먹다」が｛－어｝によって結合されたものである。形態構造は，先の二つの種類と同一であるが，(18b)のように，｛－서｝の挿入が不可能なことと，V2だけを修飾できる語句の挿入が不可能なこと，また，「먹다」の本来の意味が完全に失われていることなどの特徴を有する。これはちょうど先の(17)で指摘した考察結果と一致しており，従って本稿では，(18a)の「부려먹다」を「複合動詞」として分類する。他に「골려먹다」「놀려먹다」「들어먹다」「속여먹다」「써먹다」「알아먹다」「팔아먹다」などが同様の例として挙げられる。

8)　이양혜(2002：199～200)は，「意味の特殊化」という用語で説明しているが，「意味の特殊化」とは，意味が狭まり，内包が豊富になって外延が狭まることを指すので，(15a)の意味から(15b)の意味になるのは，厳密には「意味の特殊化」ではなく「意味変化」と言うべきである。

www.kci.go.kr

4.2. 介在要素 {－고} 有りタイプ

次に，{－고} という要素が介在するタイプを見てみよう。このタイプは，①「句」として分類されるもの，②「句」とも「複合動詞」とも分類され得るもの，の二種類に下位分類できる。

4.2.1. 「句」として分類されるもの

「먹다」をV2とする動詞結合の中で，{－고} という要素が介在し，「句」として分類されるものは，(19)の「보고 먹다」のような例が挙げられる。

(19)a. 밥은 드라마 다 보고 먹자.
b. 밥은 드라마 다 보고{서／나중에} 먹자.

(19a)の「보고 먹다」は，「보다」と「먹다」が {－고} によって結合された動詞結合であるが，(19b)のような操作が可能なことと，V1とV2のヲ格名詞(「드라마」と「밥」)が一致しないこと，また「먹다」の本来の意味もそのまま保持されていることから，「句」と判断される。ここに分類されるものはV1とV2が別々の独立した動作であることが容易に判断できるため，「句」としての認定が比較的簡単である。「읽고 먹다」「씻고 먹다」など，同じ分析が可能な例を数多く挙げることができる。金起赫(1995：345～351)も参照されたい。

4.2.2. 「句」とも「複合動詞」とも分類され得るもの

4.1.2.の例と同様に，同一の形態構造を持つ動詞結合が，文脈次第で「句」としても「複合動詞」としても分類され得ると考えられるものである。

(20)a. 간식은 조금만 더 놀고 먹자.
b. 간식은 조금만 더 놀고{서／나중에} 먹자.
(21)a. 최근 놀고먹는 사람들이 늘었다.
b. *최근 놀고{서／맘편히} 먹는 사람들이 늘었다.

(20a)の「놀고 먹다」と (21a)の「놀고먹다」は，両方とも，「놀다」と「먹다」が {－고} によって結合されたもので，同一の形態構造を持つ。しかし，前者の方は，(20b)の操作が可能なことから「句」として，後者の方は，(21b)の操作が不可能なことから「複合動詞」として考えられる。当然ながら「句」か「複合動詞」かの判断には，両者の間に見られる意味の差も考慮してある。この場合も本稿では，(21a)の「놀고먹다」は，(20a)の「놀고 먹다」の「意味変化」によるものと考える。つまり，「句」から「複合動詞」への転換として捉えるのである。なお，ここに分類されるものは，今のところ，上

www.kci.go.kr

記の１例しか見つかっていない。

4.3. 介在要素｛－어다｝有りタイプ

最後に，｛－어다｝という要素が介在するタイプである。「먹다(食べる)」をV2とする動詞結合の中で，｛－어다｝という要素が介在するものは，「句」として分類されるものしか見つからない。以下のようなものがその例として挙げられる。

(22)a. 음식은 각자 가져다 먹도록.
b. 음식은 각자 가져다{가[9]／자유롭게} 먹도록.

(22a)の「가져다　먹다」は，「가지다」と「먹다」が｛－어다｝によって結合されたもので，(22b)のような操作が可能であり，「먹다」の本来の意味がそのまま保持されていることから，「句」として考えられる。ここに分類されるものも，4.2.1.の例と同様に，V1とV2が別々の独立した動作であることが容易に判断できるため，「句」としての認定が比較的簡単であり，同一の分析が可能な例も数多く挙げられる。

4.1.～4.3.の考察結果を表にまとめると，以下のように整理することができる。

【表2】「먹다」をＶ2とする動詞結合

	句	句 / 複合動詞	複合動詞
介在要素｛－어｝有りタイプ	46	42	33
介在要素｛－고｝有りタイプ	多数	1	×
介在要素｛－어다｝有りタイプ	多数	×	×

注：「多数」は，本稿では紙面の都合上，具体的な用例を提示することはできなかったが，用例としては数多くあることを，「×」は今のところ例が見つかっていないことを意味する。数字は今回考察対象になった具体的数値である。

上記の表から言えることは，以下の二点である。

(23)a. Ｖ2として用いられる「먹다」は，｛－어｝｛－고｝｛－어다｝という要素を介在させ，「句」を豊富に生産する。
b. 「먹다」をV2とする動詞結合の中で，「複合動詞」として分類され(得)るものは，介在要素｛－어｝有りタイプがほとんどである。

韓国語には｛－어｝という要素が介在する「複合動詞」が，｛－고｝と｛－어다｝という要素が介在する「複合動詞」より多いが[10]，(23b)はそれと合致する。

9) ｛－어｝と｛－고｝が介在するタイプは，「句」か「複合動詞」かの判別に，｛－서｝の挿入可否が基準になるが，｛－어다｝が介在するタイプは，｛－가｝の挿入可否が基準になる(金(2000：101))。
10) 筆者の調査によると，『延世韓国語辞典』(1998)には，見出し語49579語(その中で，動詞総数は

www.kci.go.kr

以上，本節では「먹다」をV2とする動詞結合について考察したが，最後に，「～(어)먹다」を「補助動詞」として認定する問題について，本稿の立場を簡単に述べることにする。先行研究の中には，V2として用いられる際の意味変化に注目し，「～(어)먹다」を「補助動詞」として認定するものがある(박선옥(2005)など)。確かに，「먹다」をV2とする動詞結合の中には「(약속을)잊어먹다((約束を)忘れてしまう)」「(시동을)꺼먹다(エンジンを)止めてしまう)」など，日本語の訳から分かるように，日本語の「～てしまう」と統語と意味の面で対応するものが見られ，それらの存在は「補助動詞」としての認定の問題を考えさせてくれる。しかし，そこには「生産性」の問題がある(李(2008b))。「補助動詞」として認められるためには，ある程度「生産性の確保」が必要であるが，上記の二つの例と同じ分析が可能な例は限られている。つまり，日本語の「～てしまう」と対等なレベルで対照可能な例は多くはない11)。この生産性の問題に加え，日本語の「食べる」をV2とする動詞結合の中には「補助動詞」として認定されるものが存在しないことをも考慮し，本稿では，できるだけ対等な枠組みで対照研究を行うという意味で「～(어)먹다」を「補助動詞」として認定することはしなかった。その背景には，韓国語文法において「補助動詞」を認定する基準がまだ確立されておらず，従って，判別基準次第でそこに分類されるリストが異なり得るという事情もあった12)。「～(어)먹다」を「補助動詞」として認定する問題は「補助動詞」の判別基準とも関わるので，稿を改めて論じることにする。

5. 「食べる」と「먹다」をV2とする動詞結合の対照

本節では，3節と4節の考察結果を対照し，日韓語の間に見られる共通点と相違点を指摘する。

5.1. 「句」として分類される動詞結合の対照

まず，「句」として分類される動詞結合を対照してみよう。【表3】は，【表1】と【表2】を参考にし，「「句」として分類される日韓語の動詞結合の全体像」を示したもので

9290語)が収録されており，その中で｛－고｝が介在するものは12語，｛－어다｝が介在するものは17語しかないのに対して，｛－어｝が介在するものは638語以上も収録されている。最後のものを「638語以上」としたのは精密さに欠けるが，｛－어｝という要素が介在する「複合動詞」が，｛－고｝と｛－어다｝が介在する「複合動詞」より多いことを確認する資料としては参考になるだろう。

11) もし，上記の「잊어먹다(忘れてしまう)」「꺼먹다(止めてしまう)」などの例と同じ分析の可能な例が十分な生産性を確保し，「～(어)먹다」を「補助動詞」として認めることができるのであれば，いわゆる「文法化(grammaticalization)」という観点から分析することも可能であろう。

12) 研究者の間で「補助動詞」のリストにばらつきがあることは，박선옥(2005：91～95)などを参照されたい。

www.kci.go.kr

あるが，この表から日韓語の間に見られる重要な共通点が指摘できる。

【表3】「句」として分類される日韓語の動詞結合の全体像

		日本語		韓国語			
		介在要素○	介在要素×	介在要素○			介在要素×
		{－て}	－	{－어}	{－고}	{－어다}	－
句	限定する	多数	×	多数	多数	多数	×
	限定しない	多数	×	多数	多数	多数	×

注：「限定する」は「食べる」と「먹다」をV2として限定するという意味であり，「限定しない」はV2を特に限定しない，V2はどれでもよいという意味である。以下の表も同様である。

表を見てみると，「食べる」と「먹다」をV2として限定する場合でも，限定しない場合でも，日韓語ともに「句」の数が豊富であることが確認できるが，ここで重要なことは「句」として分類されるものは，動詞結合を形成する際に，ある要素が介在するという共通点である。日本語では｛－て｝という要素が，韓国語では｛－어｝｛－고｝｛－어다｝という要素が介在するのであるが，これを逆の見方から捉え直せば，これらの要素が介在しないタイプは，「句」として分類されない，または分類しにくいとも解釈することができる。上の表において，日韓語ともに「介在要素無しタイプ」を「×」にしたのはそのためであり，通常，以下のような「介在要素無しタイプ」の動詞結合は「句」としては分類されないことを反映したものである。

(24) 押し倒す，褒め称える，堪え忍ぶ，… (＝3b)
(25) 굶주리다，오르내리다，여닫다，… (＝4d)

もちろん，(3a)と(4a～c)に挙げた例から分かるように，｛－て｝と｛－어｝という要素が介在する「補助動詞結合」と呼ばれるものもあるし(例えば「飛んでみる」「먹어 보다」など)，｛－て｝｛－어｝｛－고｝｛－어다｝という要素が介在していても，「句」として分類しにくいもの(例えば「打って出る」「알아보다」「주고받다」「돌아다보다」など，李忠奎(2008b)を参照)があるので，それらの要素が介在するからといって，その動詞結合が「句」である保証はない。すると，｛－て｝｛－어｝などが介在するということは，「句」として分類されるための「必要条件」であって，「十分条件」ではないことになる。

5.2. 「複合動詞」として分類される動詞結合の対照

次に，「複合動詞」として分類される動詞結合の対照である。【表4】は，【表1】と【表2】を参考にし，「「複合動詞」として分類される日韓語の動詞結合の全体像」を示したものである。

www.kci.go.kr

【表4】「複合動詞」として分類される日韓語の動詞結合の全体像

		日本語		韓国語			
		介在要素○	介在要素×	介在要素○			介在要素×
		{－て}	－	{－어}	{－고}	{－어다}	－
複合動詞	限定する	×	1語	多数	1語	×	×
	限定しない	僅か	多数	多数	僅か	僅か	僅か

注：{－고} が介在する「1語」は，(21a)の「놀고먹다」を指す。

この表からすぐ指摘できるのは，「食べる」をV2とする「複合動詞」は殆どないのに対して，「먹다」をV2とする「複合動詞」は多数存在するという違いである(＝網かけ)。今回の調査では，前者が1語(＝「むさぼり食べる」)で，後者が76語(＝介在要素 {－어} 有りタイプ75語，介在要素 {－고} 有りタイプ1語)であった。しかしこれは，V2を「食べる」と「먹다」に限定しての結果に過ぎない。V2を限定せずに，日韓語の「複合動詞」の全体を見渡すと，よりはっきりした相違点が指摘できる。

表の「限定しない」ところを見てみると，日本語の複合動詞は，「介在要素無しタイプ」は「多数」「介在要素有りタイプ」は「僅か」となっている。これは，日本語の複合動詞は「押し倒す」「褒め称える」「堪え忍ぶ」のような，先に「V1の連用形＋V2」として説明した「介在要素無しタイプ」が大部分を占めており，「打って出る」「(財産が)飛んで行く」のような「介在要素有りタイプ」の複合動詞[13]は相対的に少ないことを反映したものである。一方，韓国語の複合動詞は，「介在要素有りタイプ」(の中でも，介在要素 {－어} 有りタイプ)は「多数」「介在要素無しタイプ」は「僅か」となっている。これは前述したように，韓国語の複合動詞は，介在要素 {－어} 有りタイプが大部分を占めており，例えば「오르내리다」「오가다」「여닫다」など，{－어} {－고} {－어다} がいずれも介在しないタイプの複合動詞はごく僅かしかないことを反映したものである[14]。ここで，日韓語の間に見られる相違点を以下のようにまとめることができる。

(26) 日本語の「複合動詞」は，形態構造上，主に「介在要素無しタイプ」の形で形成されるのに対して，韓国語の「複合動詞」は，形態構造上，主に「介在要素有りタイプ」の形で形成される(＝【表4】の中の太線)。

なぜ，(26)のような相違点が見られるのだろうか。その原因は，5.3.で指摘する相違点とも深く関連すると考えられる。

13)「打って出る」などの例を日本語の「介在要素有りタイプ」の「複合動詞」として認定することについては，李忠奎(2008b)を参照されたい。

14)「介在要素無しタイプ」の複合動詞が，中期韓国語では豊富に存在していたことは先行研究で報告されている。安･李(1990：105～109)，李基文(2002：157)，한길(2006：198)などを参照されたい。

www.kci.go.kr

5.3. 「句」とも「複合動詞」とも分類され得る動詞結合の対照

最後に，「句」とも「複合動詞」とも分類され得る動詞結合の対照である。【表5】は,【表1】と【表2】を参考にし，「「句」とも「複合動詞」とも分類され得る日韓語の動詞結合の全体像」を示したものである。

【表5】「句」とも「複合動詞」とも分類され得る日韓語の動詞結合の全体像

		日本語		韓国語			
		介在要素○	介在要素×	介在要素○			介在要素×
		{－て}	－	{－어}	{－고}	{－어다}	－
句／複合動詞	限定する	×	×	多数	僅か	×	×
	限定しない	僅か	×	多数	僅か	僅か	×

この表から指摘できるのは，「食べる」をV2とする動詞結合の中には，同一の形態構造を保持しながら，文脈次第で「句」としても「複合動詞」としても分類され得るものが存在しないのに対して，「먹다」をV2とする動詞結合の中には，そのような例が数多く存在するということである。この指摘は，例えば「捕って食べる」は，(27a)の文脈では「句」として成立するが，(27b)のような文脈では「複合動詞」として成立しないのに対して，「捕って食べる」に1：1の対応関係を示す「잡아 먹다」は，日本語と同一の文脈において，(28a)のように「句」としても，(28b)のように「複合動詞」としても成立するという違いを反映したものである。

(27)a. 魚を捕って食べた。 ←「句」
b. *時間を捕って食べた。
(28)a. 물고기를 잡아 먹었다. ←「句」
b. 시간을 잡아먹었다. ←「複合動詞」

繰り返しになるが，この場合本稿では，「意味変化」による「句」から「複合動詞」への転換として捉え，「複合動詞」として分類される(28b)の「잡아먹다」は「句」として分類される(28a)の「잡아 먹다」が「意味変化」を起こして生じたものと分析したのである。

「食べる」と「먹다」をV2に限定しない場合でも同じことが言える。つまり，(27)と(28)のような分析の可能な例が韓国語には数多くあるのに対して，日本語には数少ない。

(29)a. はさみで無駄な枝を切って落とした。 ←「句」
b. 一週間にわたる熱戦の幕が切って落とされた。 ←「複合動詞」

もし，(29b)の「切って落とす」を＜ある期間継続する行事などが始まる＞(『大辞泉』増補･新装版(1998：717))という意味を持つ「複合動詞」として認定することができるので

www.kci.go.kr

あれば，「句」である (29a)の「切って落とす」から「意味変化」によって「語」に転換したものと分析することが可能であろう。しかし，このように分析可能な例は，韓国語と比べるとかなり少ない。ただ，日本語においても，「意味変化」という観点から分析可能な例は数多く存在し，例えば，(30b)の「噛み殺す」は，(30a)の「噛み殺す」の「意味変化」によるものであり，(31b)の「踏み倒す」は，(31a)の「踏み倒す」の「意味変化」によるものであると分析できるので，ある特定の動詞結合が「意味変化」を起こし得るということは，決して韓国語の特有の現象ではない。

(30)a. ライオンが赤ちゃんの小鹿を噛み殺した。
b. 授業中に，洋子は何回もあくびを噛み殺した。
(31)a. 邪魔な草を踏み倒して通路を作った。
b. 結局，山田は借金を踏み倒して夜逃げした。

ここで重要なことは，「意味変化」が生じるタイプの相違である。つまり，日本語では，「意味変化」が主に「介在要素無しタイプ」で行われるのに対して，韓国語では「意味変化」が主に「介在要素有りタイプ」で行われるのである。この指摘は(26)の指摘と並行するものであり，日韓語の動詞結合の間に見られる大きな相違点になる。(32)でもう一度整理する。

(32)a. 日本語の「複合動詞」は，形態構造上，主に「介在要素無しタイプ」の形で形成されるのに対して，韓国語の「複合動詞」は，形態構造上，主に「介在要素有りタイプ」の形で形成される。(＝(26))
b. 日本語では，「意味変化」が主に「介在要素無しタイプ」で行われるのに対して，韓国語では，「意味変化」が主に「介在要素有りタイプ」で行われる。

以上の考察結果を総合すると，日本語では，主に「複合動詞」の内部で「意味変化」が生じるのに対して，韓国語では，「句」と「複合動詞」とを連結させる形で「意味変化」が生じるということが指摘できる。

では，なぜ，日韓語の動詞結合の間には，このような相違点が生じるのだろうか。次節ではその原因を究明する。

6. 日韓語の動詞結合の間に見られる相違点の根本的な原因

(32)のような相違が生じる原因を突き詰めていくと，日韓語の動詞の「語幹」に帰着す

www.kci.go.kr

る。語幹が他の要素の助けを借りず，自分ひとりの力でどれだけ立つことができるのかということを，便宜上「語幹の自立度」と呼ぶことにすれば，日韓語の動詞結合は「日本語の動詞は語幹の自立度が高いのに対して，韓国語の動詞は語幹の自立度が低い」というところに最大の違いがあると考えられる。この指摘をより詳細に説明するためには，動詞結合(特に，先に「V1の連用形＋V2」として説明した日本語の複合動詞)の内部構造を精密に分析する必要がある。

まず，日韓語の動詞の「語幹」を明確にしておこう。本稿では，加藤(2006：27)，塚本(2004：298)，益岡・田窪(1992：14)，松本(2008：49)などに従い，日本語は「活用変化しない部分」を，韓国語は「動詞の基本形から最後の｛－다｝を取り除いた部分」を動詞の「語幹」とする。すると，日韓語の動詞は，以下のように分類することができる。(33a)が「母音語幹動詞」の例で，(33b)が「子音語幹動詞」の例である。そして，「／」の左側が日本語の例で，右側が韓国語の例である。括弧内の二重下線の形態がそれぞれの語幹である。なお，以下，説明の都合上，ローマ字表記を用いる場合がある。

(33)a. 見える(mie)，食べる(tabe)[15] ／ 보이다(보이－)，때리다(때리－)
b. 焼く(yak－)，殴る(nagur－) ／ 굽다(굽－)，먹다(먹－)

このように語幹を明確に規定した後，(3)と(4)に挙げた例をより精密に分析すると，日韓語の動詞結合は，語幹の概念を導入した観点から以下のように一般化できる[16]。(34)が「介在要素有りタイプ」であり，(35)が「介在要素無しタイプ」である。

(34)a. V1の語幹 ＋ ｛－て｝ ＋ V2　　例) 食べて・みる
b. V1の語幹 ＋ ｛－어，－고，－어다｝ ＋ V2　　例) 먹어・보다
(35)a. V1の語幹 ＋ V2　　例) naguri・korosu
b. V1の語幹 ＋ V2　　例) 오르・내리다

一般に，「殴り殺す」のような日本語の「複合動詞」の形態構造は「V1の連用形＋V2」として説明されることが多いが，本稿の分析は，V1の形式を「連用形」としてではなく「語幹」として捉える考え方である。このように分析することによって，日韓語の動詞結合の間に見られる共通点と相違点をより適切に説明することが可能であると考えられるが，本稿の分析には，二点の付加説明を必要とする。

一つは，両言語とも動詞結合を形成する際に，語幹の形態が変わり得るという点であ

15) 日本語の「母音語幹動詞」は，それ自体で独立に立つことができるので「－」の表示をしなかった。
16) 日本語の「する」と「来る」は，語幹が不明確であることで例外として処理することができる。

www.kci.go.kr

る。従って，例えば「여닫다」は，「열다」が「닫다」と結合する際に，語幹「열」から最後の子音「ㄹ」が脱落し，その結果，「여」という形態がV1になったと分析すべきで，V1が語幹「열」と異なるので，「여닫다」は (35b)の例から除外されるとみるべきではない。「去ってしまう(sattesimawu)」「踏んばる(hunnbaru)」など，日本語のいわゆる「音便現象」という形態音韻上の変化が生じるものも語幹の形態が変わる例に該当する。

もう一つは，日本語の場合，V1に「子音語幹動詞」が立つと，「i」という母音が登場するという点である。(35a)の例として挙げた「naguri·korosu」(殴り殺す) の内部に見られる母音「i」のことであるが，これはV1が子音語幹動詞の場合，義務的に登場する。これについて，李(2008a)は，日本語ではモーラ音素を除いて(例えば，「あんない(案内)：／aNnai／」等)，「*nagurkorosu」の下線のような子音連続は許されないので，日本語の母音「i」は「子音連続の問題」を解決するために，形態音韻上の原理に基づいて義務的に登場するものとして位置付けた。つまり，一種の介在音素(intervening phoneme)として見たわけである。しかし，その位置付けは考察対象を動詞結合に限定した場合は有効であるが，より視野を広げると決して十分なものとは言えず，修正せざるを得なくなる。なぜなら，(36a, b)のような，いわゆる「連用中止法」と呼ばれる用法や，(36c)のような，いわゆる「転成名詞」と呼ばれるものにも母音「i」が現れ，その場合は子音連続の問題が生じないからである。

(36)a. 奈々子は新聞を読み(yomi)，里奈はドラマを見る。
b. 兄はレポートを書き(kaki)，弟は日記を付ける。
c. 歩き(aruki)，走り(hasiri)，休み(yasumi)，…

本稿では，「連用中止法」と「転成名詞」に見られる「i」も考慮に入れ，日本語の母音「i」の義務的な登場は，「日本語では，モーラ音素という例外を除けば，子音のみのモーラが存在し得ないことによる」と修正する。すると，動詞結合に現れる「i」連用中止法に現れる「i」転成名詞に現れる「i」を統一的に捉えることができる。ちなみに，本稿では，(36)の「読み(yomi)」「歩き(aruki)」などの場合も，動詞の「連用形」ではなく「語幹」と見て，「連用中止法」も「転成名詞」も語幹の一つの用法として捉える。ただし，この分析においても子音語幹動詞の場合は，上記の理由から母音「i」の義務的な登場を条件とする。

さて，本節の冒頭で，日韓語の動詞結合は「語幹の自立度」の度合いに最大の違いがあることを指摘したが，それは (35)の「V1の語幹＋V2」のタイプ，つまり，「介在要素無しタイプ」として分類される例の数の違いを反映したものである。日本語にはこのタイプに分類される例が非常に多く，『複合動詞資料集』(1987)に収録されている例だけでも，

www.kci.go.kr

7432語もある。それに比べて，韓国語には，既に指摘した通り，このタイプに分類される例が非常に少ない。この事実を踏まえた上でV1に焦点を当ててみると，「日本語の動詞の語幹は他の要素の助けを借りず，自分ひとりで立ち得る力が強いのに対して，韓国語の動詞の語幹はその力が弱い」と捉えることができる。この「語幹の自立度」の相違は，動詞結合ではなく，先の「連用中止法」と「転成名詞」といった用語で説明した例文を比べると，より明確になってくる。

(37)a. *나나코는 신문을 읽__, 리나는 드라마를 본다.
b. *형은 레포트를 쓰__, 동생은 일기를 쓴다.
c. *걷__, 달리__, 쉬__, …

(37)は，(36)の構成要素をそのまま用いて，韓国語における動詞の「語幹の自立度」を確認したものであるが，「子音語幹動詞」であれ「母音語幹動詞」であれ，韓国語としては全く成立しない。日本語と異なって，語幹がそれ自体では自立できないからである。この場合，韓国語では，下線のところに，(37a, b)の場合なら，｛－고｝という要素を，(37c)の場合なら，名詞を派生する接尾辞｛－기｝か｛－음／－ロ｝を挿入し，それらの助けを借りなければならない[17]。

このように，日韓語の間には，動詞の「語幹の自立度」において相違があり，(32)で指摘した相違点は，それが反映された結果であると考えられる。つまり，日本語の動詞の語幹は自立度が高いため，｛－て｝の助けを（借りることは勿論可能だが，たとえ）借りなくても，「押し倒す」「噛み殺す」「凍え死ぬ」「叩き割る」のような「介在要素無しタイプ」(＝「複合動詞」)を豊富に生産させ，その結果，日本語では「介在要素無しタイプ」(＝「複合動詞」)が一つの強大なグループを形成するようになる。この強大なグループは，「押して倒す」「噛んで殺す」「凍えて死ぬ」「叩いて割る」のような｛－て｝が介在する「介在要素有りタイプ」と，「V1とV2の結合度」や「意味変化」などの面で対立しながら共存する[18]。それに比べて，韓国語の動詞の語幹は自立度が低いため，｛－어｝｛－고｝｛－어다｝の助けを借りる場合が多くなり，その結果，「介在要素無しタイプ」(＝「複合動詞」)が1つの強大なグループを形成できず，それを「介在要

17)「갈림길」「비빔밥」「줄넘기」などの複合名詞の例からも同様のことが言える。つまり，韓国語では，「*갈리길」「*비비밥」「*줄넘」のように，語幹が複合名詞の一部要素として自立できず，「ロ」か「기」の助けを借りなければならない。ちなみに，この場合日本語は，「分かれ道」「混ぜご飯」「縄跳び」から分かるように，語幹が複合名詞の一部要素として自立できる(ただし，「子音語幹動詞」の場合は，母音「i」を義務的に挿入する必要がある)。

18) 勿論，「たばこの火を揉み消した」は成立しても「*たばこの火を揉んで消した」は成立しないし，また「さんまを焼いて食べた」とは言っても，「*さんまを焼き食べた」とは言わないことから，「介在要素無しタイプ」と「介在要素有りタイプ」が「押し倒す」と「押して倒す」などのように，常に1：1の関係で対立しながら共存するという保証はない。

www.kci.go.kr

素有りタイプ」の方に譲る。1つの強大なグループを形成するようになった「介在要素有りタイプ」は，その中に，同一の形態構造を持つ「句」と「複合動詞」(と「補助動詞結合」と)を含んでおり，それらが混在している結果，ある動詞結合が「句」なのか「複合動詞」なのかということが大きな問題になったり，「句」から「複合動詞」への転換として分析可能な例が数多く見られたりするのである。

7. まとめと今後の課題

本稿では，「食べる」とそれに対応する「먹다」をV2とする日韓語の動詞結合について考察し，日韓語の動詞結合の全体像を示した後，日韓語の動詞結合は，「日本語の動詞は語幹の自立度が高いのに対して，韓国語の動詞は語幹の自立度が低い」という「語幹の自立度」に最大の違いがあることを主張した。本稿では紙面の都合上，この分析によって説明できる共通点や相違点を具体的に提示するまではできなかったが，「語幹」という概念を導入することで，日韓語の動詞結合の間に見られる幾つかの現象が適切に説明できると考えている[19)]。それを具体化することは今後の課題となる。

【参考文献】

姜炫和(1998)『국어의 동사연결 구성에 대한 연구』한국문화사
金起赫(1995)『국어 문법 연구—형태·통어론—』도서출판 박이정
_____(1996)「국어 합성동사 생성의 통사·의미학적 해석」『국어국문학』116, 1-37, 국어국문학회
金錫得(1992)『우리말 형태론—말본론—』탑출판사

19) たとえば，(34)のような「介在要素有りタイプ」の(中の)「複合動詞」は，「語」といってもその内部に一部の要素(「は」「만」等の副助詞)の介入を許容する場合があるという共通点(「(選挙に)打っては出たが，～」「후배를 실컷 부려만 먹고，～」)や，(35)のような「介在要素無しタイプ」は，V1とV2が極めて緊密に結合されているため，その内部に如何なる要素の介入も許容しないという共通点(「*(太郎が次郎を強引に)押しは倒したが，～」「*(몇 개의 봉우리를)오르는 내렸지만，～」)などが統一的に説明できる。ちなみに，後者の二つの例文は，「(太郎が次郎を強引に)押し倒しはしたが，～」「(몇 개의 봉우리를)오르내리기는 했지만，～」なら適格な文として成立する。

www.kci.go.kr

金鎰炳(2000)『국어합성어연구』도서출판 역락
金倉燮(1981)「現代国語의 複合動詞 研究」『国語研究』47, 国語研究会
_____(1996)『국어의 단어형성과 단어구조 연구』국어학회
南基心·高永根(1993)『표준국어문법론—개정판—』탑출판사
박선옥(2005)『국어 보조동사의 통사와 의미 연구』도서출판 역락
徐正洙(1992)『국어 문법의 연구Ⅱ』한국문화사
_____(1996)『수정 증보판 국어문법』한양대학교출판원
손세모돌(1996)『국어 보조용언 연구』한국문화사
安秉禧·李珖鎬(1990)『中世国語文法論』학연사
李基文(2002)『新訂版　国語史概説』태학사
이양혜(2002)「'먹다'의 기능과 의미 변화」『한국어학』15, 185-210, 한국어학회
李翊燮·蔡琬(2001)『국어문법론강의』학연사
한길(2006)『현대 우리말의 형태론』도서출판 역락
李忠奎(2008a)「日韓語の複合動詞形成システムの相違—対義語同士の組み合わせを中心に—」『国語国文研究』134, 1-17, 北海道大学国語国文学会
李忠奎(2008b)「日韓語の動詞結合に関する対照研究」北海道大学大学院文学研究科博士学位論文
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
_____(1999)『形態論と意味』くろしお出版
_____(2006)「外項複合語と叙述のタイプ」益岡隆志·野田尚史·森山卓郎編『日本語文法の新地平1　形態·叙述内容編』1-21, くろしお出版
加藤重広(2006)『日本語文法　入門ハンドブック』研究社
塚本秀樹(2004)「文法体系における動詞連用形の位置づけ：日本語と韓国語の対照研究」佐藤滋·堀江薫·中村渉編『対照言語学の新展開』297-317, ひつじ書房
野村雅昭·石井正彦(1987)『複合動詞資料集』国立国語研究所
姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
益岡隆志·田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
松本隆(2008)『韓国語から見えてくる日本語—韓流日本語鍛錬法—』スリーエーネットワーク

【辞典類】

『広辞苑』第五版(1998)　岩波書店
『大辞泉』増補·新装版(1998)　小学館
『延世韓国語辞典』(1998)　Doosan Dong - A

www.kci.go.kr

要 旨

本稿では，日本語の「食べる」とそれに対応する韓国語の「먹다」をV2とする動詞結合を取り上げ，①日韓語の動詞結合の中で，「句」として分類されるものは，基本的に介在要素(日本語では｛－て｝，韓国語では｛－어｝｛－고｝｛－어다｝)を必要とする「介在要素有りタイプ」であること，②日本語の「複合動詞」は，形態構造上，主に「介在要素無しタイプ」の形で形成されるのに対して，韓国語の「複合動詞」は，形態構造上，主に「介在要素有りタイプ」の形で形成されること，③上記の二つの指摘が関わって，同一の形態構造を保持しながら，文脈次第で「句」とも「複合動詞」とも分類され得る動詞結合が，日本語には僅かしかないのに対して，韓国語には豊富に存在すること，の3点を確認した。そして，②と③の相違点は，「語幹の自立度」の違いによるものであり，具体的には「日本語の動詞は語幹の自立度が高いのに対して，韓国語の動詞は語幹の自立度が低い」ということが相違点の根本的な原因であることを主張した。

キーワード： 動詞結合，句，複合動詞，意味変化，語幹，語幹の自立度

투　　고：2009. 2. 28
1차 심사：2009. 3. 14
2차 심사：2009. 3. 28

www.kci.go.kr